

友の会ニュース

2009 September No.9

William Kentridge What We See & What We Know ウィリアム・ケントリッジ

一歩きながら歴史を考える

そしてドローイングは動き始めた……
2009年9月4日(金)～10月18日(日)

ウィリアム・ケントリッジ (1955 南アフリカ共和国生、ヨハネスブルグ在住) は、1980年代末から、「動くドローイング」とも呼べるアニメーション・フィルムを制作しています。木炭とパステルで描いたドローイングを部分的に描き直しながら、その変化を1コマ毎に撮影する気の速くなる作業により、絶えず流動し変化するドローイングを記録することで生まれる彼の作品は、独特の物語性と共に集積された行為と時間を感じさせる重厚な表現となっています。

ケントリッジの作品は南アフリカの歴史と社会状況を色濃く反映しており、自国のアパルトヘイトの歴史を痛みと共に語る初期作品は、脱西欧中心主義を訴えるポストコロニアル批評と共鳴する美術的実践として、1995年のヨハネスブルグ・ビエンナーレや1997年のドクメンタ10などを契機に世界中から大きな注目を集めるようになりました。しかし私たちは、その政治的外見の奥で、状況に抗する個人の善意と挫折、庇護と抑圧の両義性、分断された自我とその再統合の不可能性などの近代の人間が直面してきた普遍的問題を、彼の作品が執拗に検証し語り続けていることに注目すべきでしょう。「石器時代の映画制作」と自称する素朴な制作技法に固執しながら、ケントリッジは近代の物語生成の原点を、そしてヨーロッパ植民地主義の病理の原点を作品を通じて探求しているのです。精緻なセル画アニメやCGが主流である現代のアニメーション制作の状況の中で、ケントリッジの素朴な技法は対極に位置していますが、強靱な知性に支えられた力強い表現は、ドローイングのコマ撮りアニメーションが未だに有力な表現手法となり得ることを証明しており、1990年代中頃からその作品は、世界中の若い世代の美術家たちに大きな影響を与え



《やがて来たるもの(それはすでに来た)》
(2007)、ビデオ・インスタレーション
京都国立近代美術館蔵
撮影:四方邦照 ©the artist

続けています。
今回の展覧会は、京都国立近代美術館とウィリアム・ケントリッジとの3年間にわたる緊密な協同作業を経て実現されるもので、日本では初の大規模な個展となります。南アフリカの歴史を扱った



《俺は俺ではない、あの馬も俺のではない》より
《同志鼻陛下》(2008)、フィルム・インスタレーション
京都国立近代美術館蔵 ©the artist

展覧会関連レクチャー

「ウィリアム・ケントリッジを語る」

日時:2009年10月9日(金)

17:00～18:00

講師:河本信治(当館学芸課長)

当展覧会担当である学芸課長が、当館講演室と展示会場で、作家と展覧会について語ります。

聴講無料、先着30名(友の会会員優先、一般も含む)

初期の代表作《ソーホー・エクスタインの連作》(1989-2003)から、シヨスタコーヴィチのオペラ『鼻』を題材にした最新作の《俺は俺ではない、あの馬も俺のではない》(2008)まで、フィルム・インスタレーション3点を含む19点の映像作品と、36点の素描、64点の版画により、ウィリアム・ケントリッジという私たちの同時代の美術家の作品とその知的挑戦の全体像を紹介します。

この展覧会と関連して、当館4階のコレクション・ギャラリーの一角では、実体鏡(ステレオスコープ)と附属の絵、そして円柱鏡・円錐鏡(アナモルフォーシス)が展示されています。



《実体鏡とマルテウス・マツドルフ氏絵》
1913(大正2)年、島津創業記念資料館蔵
撮影:四方邦照

ウィリアム・ケントリッジは、これらの古典的とも言える画像や映像の技法に、非常に関心を持って作品制作に取り入れています。

写真が発明された19世紀前半において、写真以外の視覚イメージの最も重要な形式はストロボスコープでした。別名を「回転のぞき絵」という通り、円筒状の装置を回転させ、スリットを通して中をのぞくことによって対象が動いて見える技法です。この動画(アニメーション)の他には、実体鏡(ステレオスコープ)による三次元的画像があげられます。これらの試みは、いかにリアルな世界を再現できるかという挑戦でした。

これらの技法と一種のトリックである円筒鏡・円錐鏡(*)との共通点は、対象を単に見るのではなく、意識的な注視を要求する点です。つまりどの技法も、鑑賞者の能動的な関与による再構築において、初めて成立するのです。今回島津創業記念資料館の協力を得て、小学校の図工科教材としても使用されている同様の原理の資料(二代島津源蔵が考案)を紹介しています。

* 別名アナモルフォーシス。歪んだ画像を円筒などに投影したり、角度を変えてみたりすることで、正像が見えるようになる技法。鑑賞者は歪んだ像を見ながら、投影された正像を同時に見るという二重の視点を強いられる。角度変更による投影は早期ルネサンス(15C)、円筒などへの投影はバロック時代(17C)に確認されている。アナモルフォーシスとはギリシャ語で再構成を意味する。

コレクション展

イチハラヒロコ+箭内新一「プレイルーム。」2009

2009年9月15日(火)

～10月18日(日)

今回で3回目となる言葉と立体によるインスタレーション「プレイルーム。」が1階ロビーで開催中です。お気軽にお立ち寄りください。



イチハラヒロコ+箭内新一「プレイルーム。」2007
京都国立近代美術館蔵、撮影:Tomas Svab

ボルゲーゼ美術館展

華麗なるイタリア貴族のコレクション

2009年10月31日(土)～12月27日(日)

イタリア、ローマ市北東部の広大なボルゲーゼ公園に位置する同美術館は、名門貴族であったボルゲーゼ家歴代のコレクションで知られており、世界に名だたるルネサンス・バロック美術の宝庫とされています。

本展は、その珠玉のコレクションから選ばれた、ラファエロやポッティチェリといったルネサンスを代表する巨匠をはじめ、バロック絵画の先駆けであり「最初の近代画家」とも言われるカラヴァッジョ、そしてジャン・ロレンツォ・ベルニーニら、文字どおりイタリア美術の最盛期を概観できる内容となっています。

今回はボルゲーゼ美術館のコレクションを日本でまとめてご紹介する初めての試みであり、その多くが日本で初公開の作品です。15世紀から17世紀まで、歴史の推移に沿って作品を見ていただくことで、「輝ける時代」に展開した「表現の変遷」をわかりやすく理解できる構成とします。またローマ教皇と枢機卿を輩出したボルゲーゼ家の歴史に加え、17世紀に建てられた「ヴィラ・ボルゲーゼ」を現在も展示室とする、美術館の壮麗な建築もご紹介します。

カラヴァッジョやベルニーニのバトロンであった枢機卿シピオーネ・ボルゲーゼと彼を起点に築き上げられたボルゲーゼ・コレクション誕生の背景を知るとは、ルネサンスからバロックへと至る、歴史上まれに見る時代のうねりと、固有の文化の在り方を日本の鑑賞者が理解していく、得がたい機会になることでしょう。

およそ250年にわたるイタリア美術の流れを、約50点の名品の数々によってご覧いただく本展は、ラファエロの《一角獣を抱く貴婦人》をハイライトに、カラヴァッジョという「異端者」とその追隨者(カラヴァジェスキ)たちが登場する終盤に向けて、われわれに忘れがたい印象を残すものになると確信しております。



ラファエロ・サンツィオ《一角獣を抱く貴婦人》(1505-06)
ボルゲーゼ美術館蔵



ボルゲーゼ美術館(1612-15)
設計:ジョヴァンニ・ヴァサンツィオ、フラミニオ・ポンツィオ

●記念講演会

- 11月14日(土)「ボルゲーゼ美術館とカラヴァッジョ」
講師:宮下規久朗(神戸大学大学院准教授)
- 11月28日(土)「作者を探せ! ボルゲーゼ美術館と二人の目利き」
講師:岡田温司(京都大学大学院教授)

時間:午後2時～

会場:京都国立近代美術館・1階講演室

定員:100名(当日11時から整理券を配布します)、聴講無料
※その他のイベントについては http://bor.exh.jp/event_tv.html をご覧ください。

●NFC所蔵作品選集 MoMAK Films @ Goethe5

上映時間:各回14:00～19:00頃(開場は13:30)

料金:1プログラム500円、当日券のみ

定員:先着100席

当日13:30より受付で当日分のすべての作品の整理番号付き入場券を販売、開場いたします。各回入替制です。2回目以降は各上映開始の10分前に開場します。

※入場は整理番号順・自由席です。(椅子席、敷席があります。)

入場券は当日・当該回のみ有効です。前売券はありません。

会場内での飲食はご遠慮願います。

主催:京都国立近代美術館(MoMAK)

東京国立近代美術館フィルムセンター(NFC)

協力:ドイツ文化センター(京都)

会場:Goethe-Institut Japan in Kyoto / ドイツ文化センター(京都)
〒606-8305 京都市左京区吉田河原町 19-3 (川端通荒神橋上ル) / TEL:(075) 761-2188

交通案内:<http://www.goethe.de/ins/jp/kyo/knt/anf/fjindex.htm>

ピアノ奏者 長谷川慶岳(はせがわ・よしたか)

東京芸術大学音楽学部作曲科を経て、同大学院修士課程作曲専攻を修了。その後フランスに留学、パリ・エコール・ノルマル音楽院作曲科ディプロム・シュペリールを首席で取得。現在、大阪音楽大学准教授。

今後の上映予定

3. 2009年11月14日(土) ソヴィエト

1920年代に世界を座巻したソヴィエト映画の豊富な成果を横断的に紹介。帝政ロシア時代のエフゲーニー・パウエル監督門下から宣伝映画を経て、グルジア映画を築いたペレスチアーニと、理論・実作の両面からソヴィエト映画を領導したクレシヨフ。クレシヨフ工房出身のバルネット。彼らの活劇、喜劇に底流するモダニティを再確認する。

『国境の町』(1933年、監督:ボリス・バルネット)

『赤い小悪魔』(1923年、監督:イワン・ペレスチアーニ)

『ポリシェヴィキの国におけるウェスト氏の異常な冒険』(1924年、監督:レフ・クレシヨフ)

4. 2010年1月16日(土) 中国

映画大国・中国の、1930年代末から40年代の激動の映画状況を比較。アメリカ映画の影響と洗練された話法や娯楽性で黄金期を築いた上海映画に描かれた上海、中満合作の『萬世流芳』が再現した広州、そして満鉄の芥川光蔵がドイツ製レンズで切り取った満州。これらに描かれた中国社会、映画人の視点、を多角的に検証する。

『娘々廟会』(にゃんにゃんめやをほい)(1940年、監督:芥川光蔵)

『萬世流芳』(1942年、監督:卜萬蒼、朱石麟、馬徐維邦、張善琨、楊小仲)

『馬路天使/街角の天使』(1937年、監督:袁牧之)

5. 2010年3月13日(土) 日本

P.C.L.・東宝のモダンな作風を体現した伏水修のミュージカル・コメディを特集。生誕100年を機に、黒澤明に夭折を惜まれた伏水の仕事を再発見する。あわせて生誕105年を迎える斎藤寅次郎の真骨頂ともいべき、発掘作2篇を含むスラップスティック・コメディを上映。

『モダン怪談 100,000,000円』[松竹グラフ版](1929年、監督:斎藤寅次郎)

『石川五右衛門の法事』[パテベビー短縮版](1930年、監督:斎藤寅次郎)

『爆弾花嫁』(1935年、佐々木啓祐)

『君を呼ぶ歌』(1939年、監督:伏水修)

『世紀の合唱 愛國行進曲』(1938年、監督:伏水修)

『東京ラプソディ』(1936年、監督:伏水修)

※全作品 35mm、外国語作品は日本語字幕付。上映作品は予告なく変更する場合があります。

お問い合わせ:京都国立近代美術館

ドイツ文化センター(京都)

TEL(075) 761-2188 <http://www.goethe.de/kyoto>

京都市立芸術大学主催

●オータムナイト・コンサート～芸術都市パリの散歩～

日時:2009年10月3日(土)18:00開演、入場無料

会場:京都国立近代美術館・1階ロビー

優待席をご用意してお待ちしております。